

# 森永製菓の児童文化関連事業

——昭和初期の状況・池田文痴菴文庫を手がかりとして——

Children's Cultural Projects Organized by Morinaga & Co. Ltd.:

with Reference to Society in the Early Showa Period and the Ikeda Bunchian Library

酒井晶代

Masayo Sakai

## 一、はじめに

昭和初期、製菓会社は文化に急接近する。一九二七（昭和二）年から江崎商店（現江崎グリコ）は栄養菓子「グリコ」に豆玩具のオマケを封入し、さらに二年後には新たに考案されたオマケ小箱が好評を博して売り上げを伸ばしていく<sup>1)</sup>。明治製菓（現明治）は東京菓子株式会社時代にあたる一九二三（大正12）年六月からPR誌『スイート』を発行し、当初こそ販売店向けの商品情報が誌面を占めていたものの、次第に小川未明らの子ども向け読み物も掲載するようになる<sup>2)</sup>。

このような製菓会社と文化の接近のなかでも、森永製菓（以下本稿

では「森永」と省略する）の児童文化に関する事業は、その種類や規模において他を凌駕するものと言えよう。たとえばこの時期に同社の看板キャンペーンとなった「キャラメル芸術」は、「年毎に応募数を増して第四回の昭和十年には参加学校二千余校、応募作品数五十六万余点に達する盛況を呈した」<sup>3)</sup>との記録が残されている。審査員に東京美術学校教授、東京女高師教官、帝国美術院顧問のほか、漫画家や玩具研究家、口演童話家などを迎え、「ゴドモの帝展」と称して入選作の展覧会を上野や京都美術館で開催したこの事業では、関連して教授本が刊行されたり、入賞者の一覧やインタビューを掲載した新聞が発行されたりもした<sup>4)</sup>。震災後のこの時期をめぐる、紅野謙介は「印刷

技術の向上にともない洗練の度合をたかめたポスター、ビラが都市を中心に大量にばらまかれ」たことによつて、「街路、ビルの外壁、駅頭、ショーウィンドウ」が「商業的に図案化された文字と絵のキャンバスに変わり、それを見る視線の主体を消費社会の担い手として組織した」と指摘する<sup>5)</sup>。文字と図案が織りなす宣伝広告が商品の販売に大きな力を持ち始めるなか、森永はそのフロントランナーとして「宣伝の森永」「広告の森永」の評価を得ていく。社史は「単なる販売を目的とした広告の域を超え、教育や文化的な貢献にも結び付く大きな影響力を持つ」ったこの時代の宣伝について「森永一〇〇年の歴史の中にとどまらず、日本の広告宣伝史の上でも、社会公共性に密着した意義のある活動が数多く展開され、広告宣伝が社会現象（ブーム）を巻き起こす力を持つことを立証した点で特筆される時代」と位置付けている<sup>6)</sup>。

しかし、このように高い評価がなされ、広告史の文献などでもしばしば部分的に取り上げられるものの、当時の製菓会社の広告宣伝の全体像を把握することはなかなか容易ではない。たとえば書物や雑誌などの印刷物はその多くが非売品扱いであり、景品やおマケとして流通した。それゆえに公共図書館などの所蔵対象になりにくく、現物の入手が難しい。また、イベントやキャンペーンに関して、開始時期は社史などの公式記録で確認できるが、終了時期が確定できない（社史

や年表に記載がない）ケースが多い。このような資料上の制約があるためか、関係者の証言や回想録を除けば、児童文化史のなかで製菓会社の広告宣伝と文化財・文化活動の関わりをめぐる研究はまだ充分に進んでいないという現状がある<sup>7)</sup>。

さいわい森永については大正末期から昭和二〇年代まで同社で広告宣伝に携わった池田文痴菴の蒐集資料が埼玉県立浦和図書館に保存されている。そこで本稿では緒にいたばかりではあるが、現時点までに確認できた資料<sup>8)</sup>に基づきながら昭和初期に森永が実施した児童文化関連事業の概観を行う。さらに特に印刷物の発行をめぐつて中核を担ったと推測される池田文痴菴（本名・池田信一）と南部新一（筆名・南部巨国、新井弘城）に注目し、事業の推進にどのようなネットワークが寄与したのか、その一端を探りたい。

## 二、児童文化関連事業の概況

昭和初期に森永が実施した子ども対象の事業<sup>9)</sup>は、①イベントやキャンペーンの開催、②書物をはじめとする印刷物の発行、③新商品の発売の三種に大別することができる。先述のとおりイベントの実施期間や刊行物の終刊時期など詳細が把握できていないものも多いが、主として『森永五十五年史』（一九五四年）と『森永製菓一〇〇年史』

(二〇〇〇年)の年表をもとに種類と実施時期を(表1)にまとめた<sup>10)</sup>。

イベントやキャンペーン関係では、一九三一(昭和6)年の「飛行機セール」から三八(同13)年の「日独伊親善図画」までの八年間に特に多くの事業が集中している。「飛行機セール」は森永号と名付けられた複葉機による九州から北海道までの縦断飛行と、ミルクキャラメルを購入者に紙製飛行機模型を景品として提供するサービスを組み合わせたキャンペーンで、森永号は主要都市を訪問飛行し、飛来地では地方紙とタイアップした大規模な宣伝が繰り広げられた。キャンペーン中に提供された模型は三〇〇万個にのぼったとされる<sup>11)</sup>。さらにターゲットを子どもに特化して翌年から継続的に実施されたのが先述の「キャラメル芸術」である。ミルクキャラメルやチョコレート空函、包装紙を利用した工作(貼り絵や立体物)を公募し、文化人による審査を経て入賞作品を決定、百貨店や美術館で大規模な展示会が開かれた。「支那事変の勃発による戦時体制の強化と経済統制による物資不足のため」<sup>12)</sup>、三七(同12)年をもって終了となるが、その後も皇軍慰問図画募集や日独伊親善図画募集のように、時局を意識しながら子どもをターゲットとした公募型のキャンペーンが継続されていく。『森永五十五年史』によれば、皇軍慰問図画には一九五五〇〇〇点、日独伊親善図画には国内応募作品だけでじつに四〇〇万三〇〇〇〇点が

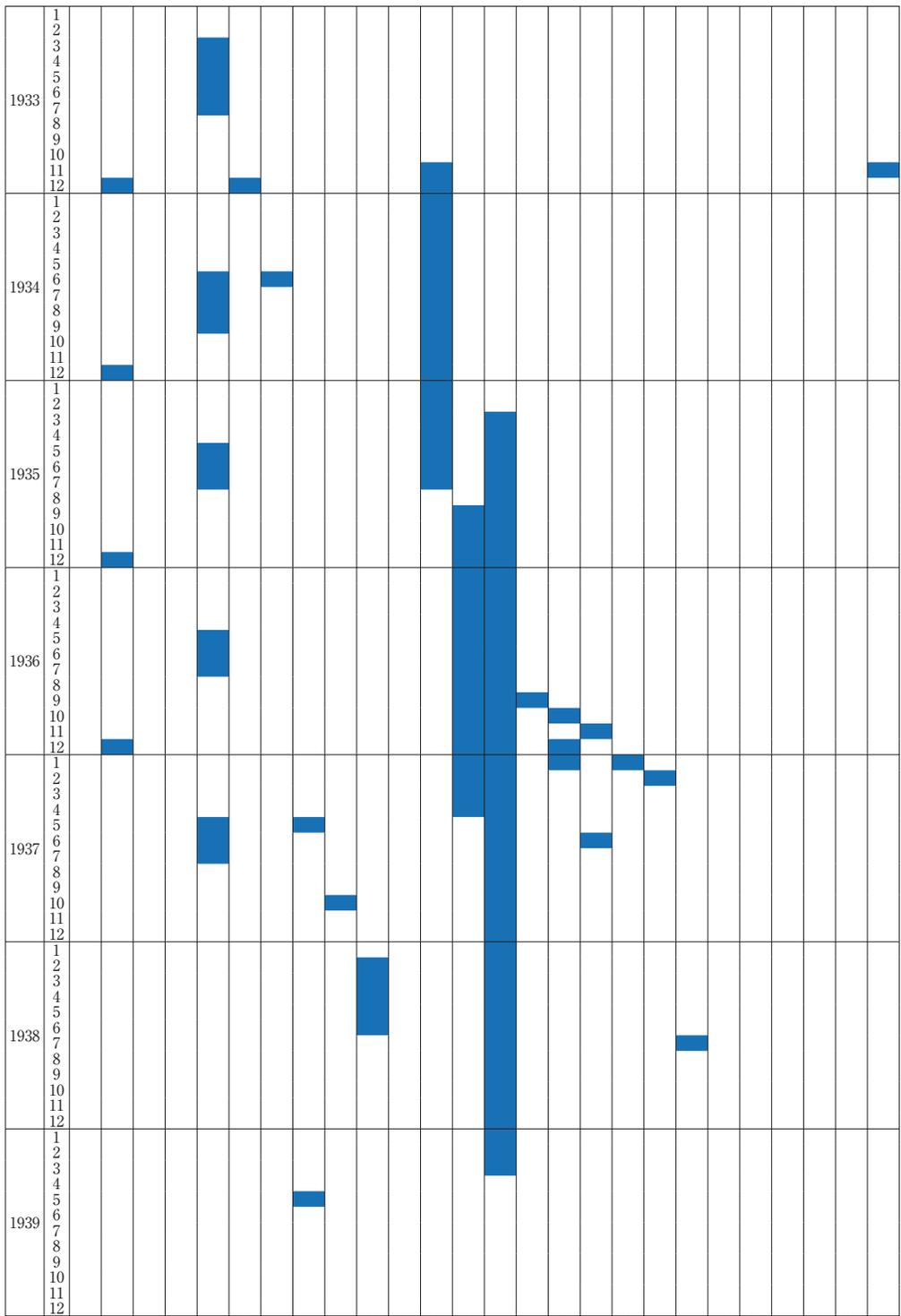
集まったという<sup>13)</sup>。

印刷物の発行はやや遅れて一九三三(昭和8)年の月刊児童新聞『オカシノクニ』発刊のころから盛んになる。子ども向け栄養菓子「ミゼット」の発売を機に発刊された同紙はタブロイド判より一回り大きい四六三×三一〇ミリの判型で四く六頁だて<sup>14)</sup>、後述するように読み物も数多く掲載された。なお連載記事が継承されていることから『スカートランド』は『オカシノクニ』の後続紙と考えられる。もうひとつ長期にわたる発行が判明しているのが三五(同10)年三月創刊の雑誌『漫画学校』である。創刊号は二二四×一五五ミリで本文三二頁。判型はその後何度か変更され、タイトルも片仮名で『マンガガッコウ』と表記された時期がある。終刊時期は不明だが、これまでに三九(同14)年三月発行分まで現物を確認できた。タイトルのとおりコンテンツは漫画が中心であるが、絵雑誌的な記事や読み物の掲載も多<sup>15)</sup>い。

その他の刊行物としては、ミゼット宣伝のための景品類と一九三六(昭和11)年九月からミルクキャラメル中函に印刷された「昆虫漫画」に端を発する昆虫関連の冊子類がある。ミゼットの販売促進用には(表1)に挙げた「立体紙芝居」のほかに、「パノラマ」や「ドラマ」もシリーズで刊行されていたらしい<sup>16)</sup>。現物を確認できた立体紙芝



森永製菓の児童文化関連事業



※イベント、キャンペーンのうち以下は実施期間不明のため、開始年月のみを表示した：キャラメル懸賞マーク合せ、キャラメル大将出張宣伝、皇軍慰問図画  
 ※印刷物のうち「昆虫漫画」は開始年月を表示。その他は現物確認ができた資料の発行日ないしは発行期間を表示した。  
 ※商品の発売については、すべて発売開始年月を表示した。

居『支那事変・熱血物語 戦ふ少年』（作者不詳、非売品）は一三三×一九〇ミリ、全七画面からなる飛び出す絵本で、日中戦争に従軍した二人の少年が夜襲に遭い、援軍が来るまで勇敢に戦う様子を物語っている。昆虫漫画は選者に岡本一平を迎え、横山隆一や近藤日出造、森比呂志などが寄稿、「五〇〇種以上もあり大変な人気となった」<sup>17</sup>とされるもので、昆虫童謡や昆虫伝説の募集等、関連事業が数多く実施されたことからその人気ぶりが推測できる<sup>18</sup>。

漫画を掲載することでキャラメルの中函に誌面の機能を持たせたこの「昆虫漫画」と同様に、子どもをターゲットとする新商品にもさまざまな工夫が加価値が凝らされた。一九三一年（昭和6）年発売の「少年少女キャラメル」は外函に人物や家、乗り物などが印刷されており、切り抜いて折り曲げると紙製の玩具になる。翌年の「絵本キャラメル」は一〇五×七五ミリの外函が本文一八頁の豆絵本になっている商品（二〇個入り一〇銭）で、全一〇集が刊行された<sup>19</sup>。待ち合わせの約束をめぐって少女たちの気持ちの行き違いを描いた第四集『三人の少女』（大倉桃郎…作、須藤重…画）、猿回しの猿が暇をもらって飛行機に乗り、野球のホームランボールを追いかけて月まで旅をする第六集『サルノホームラン』（巖谷小波…作、中江正美…画）、おじいさんの問いかけに答える形で土手に咲く桔梗の花が川辺の風景や生き

物の様子を語る第九集『桔梗と小川メダカ』（キシベエンチヨウ…作、武井武雄…画）等の創作のほか、漫画、イソップの再話、リンドバーグや東郷元帥の偉人伝など内容は変化に富む。さらに外函側面の差し込み部分に回文（「タイカガカイタ（大家が書いた）」「ダンスガスタ（ダンスが済んだ）」など）や早口言葉、数字名勝（八百八町…東京、八百八谷…木曾、八百八橋…大阪など）が印刷されている集もあり、函全体を遊びの場として捉え、活かそうとする意気込みがうかがえる。長く取締役を務め、一九三五（昭和10）年に第二代社長に就任する松崎半三郎は、のちに昭和の初めから七年までの経営を振り返って「未曾有の受難時代」「危急存亡の時代」であったと述べている<sup>20</sup>。金融恐慌や世界恐慌による不況を背景に、競合他社が商品の値下げに踏み切るなかで、森永は価格と規格を据え置いて積極的な広告宣伝で対抗したと言われる<sup>21</sup>。子どもをターゲットとするこれらの諸事業もこの積極策のひとつであった。そして事業の実施をとおして、同社は学校教育（「キャラメル芸術」「日独伊親善図画」）や児童出版界（児童新聞や雑誌、絵本の発行）とのネットワークを着実に築いていったと考えられる。

### 三、池田文痴菴と南部新一

児童文化事業、とりわけ印刷物の発行について社内での中心的な役割を果たしたのが、池田文痴菴（池田信一）である。

池田の経歴や森永の広告宣伝との関わりについては、南陀楼綾繁

「池田文痴菴と森永製菓（全三回）」<sup>(22)</sup> に詳しい。一九〇一（明治34）

年、東京麻布に生まれた池田は明治薬学専門学校を卒業後、海軍造兵廠で予算や統計の仕事に従事するが、二三（大正12）年に軍縮により

退職すると、同年春に森永に入社している。入社後は調査部を皮切り

に計画部（昭和8年）、製品企画課（同10年）、学芸部（同11年）、総務

部庶務課（同12年）と異動しながら「製品普及のための企画と、各種

広報誌の編集」に従事した<sup>(23)</sup>。幼時から蒐集を好み、「インディ

ファアレント」(indifferent) な事物に強い愛着を示した彼は「イケ

ダコレクション」名付けた膨大な風俗資料により二十代のころから蒐

集家としても広く知られる人物であったが、四五（同20）年五月の空

襲でその大半を焼失してしまう<sup>(24)</sup>。戦後は浦和に移って蒐集活動を

再開、森永退職後は東京高等製菓学校などで教鞭をとる傍ら、史料を

駆使して社史編纂や大著『日本洋菓子史』（一九六〇年）の執筆に従事

した。七二（同47）年に逝去。四千五百点を超えるコレクションは遺

族により埼玉県立浦和図書館に寄贈され、先述のとおり「池田文痴菴  
文庫」として保存されている<sup>(25)</sup>。池田は二六（大正15）年から四〇

（昭和15）年まで同社および傍系会社の刊行物の編輯署名人を務めて

おり、先述の『オカシノクニ』『スカーポートランド』『漫画学校』『絵本

キャラメル』もすべて編輯発行人欄には彼の名前が記されている。こ

の時期の森永の編纂物を一手に引き受けていた人物と言つてよいだろ

う。

一方の南部新一は一九一五（大正4）年から二八（昭和3）年まで

博文館に在籍し、『幼年画報』『幼年世界』『少年世界』などの雑誌編輯

と執筆に従事した人物である。一八九四（明治27）年、京都府加佐郡

（現舞鶴市）に生まれた南部は、『少年世界』の熱心な読者で、高等小

学校卒業のころには主筆の巖谷小波に入館希望の手紙を書き送るほど

であった。博文館退館後の一九二八（昭和3）年秋には自ら青蘭社出

版部（以下本稿では「青蘭社」と略す）を興し、『トモダチ』『幼女画

報』といった幼年向けの絵雑誌を発行している。森永との直接的な関

わりはおそらくこの時期に始まり、そして青蘭社は創業から一年足ら

ずで森永との合資会社に改組され、実質的に傘下に置かれることとな

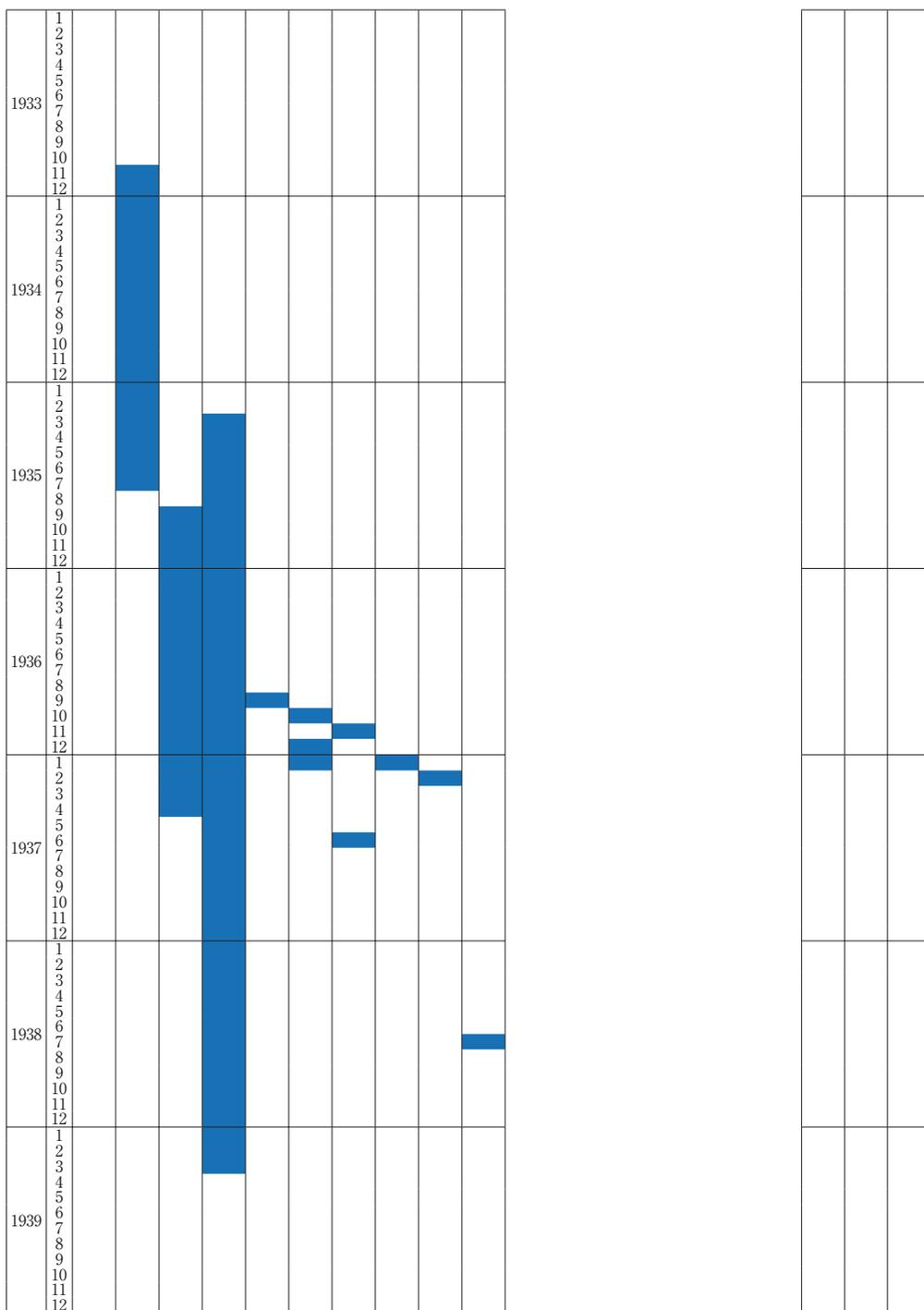
る。詳細は別稿<sup>(26)</sup>に譲るが、改組後の青蘭社は自社発行誌の裏表紙

等に森永の広告を掲載するとともに、かなりの部数を森永経由で流通

〈表2〉出版物をめぐる森永製菓（傍系会社を含む）と青蘭社の関係（1927～1939年）

西暦	月	モリナガエホン	オカシノクニ	スキートランド	漫画学校	昆虫漫画	昆虫童謡珠玉集	昆虫漫画の集と	ミゼット昆虫双六	諸国昆虫伝説集	立体紙芝居	池田文痴菴履歴	南部新一履歴	トモダチ	幼女画報	少年少女絵物語
												1923年4月、森永入社。	1915年6月、博文館入館。			
1927	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12															
1928	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12											3月、傍系会社オカシノクニ社社長、創作工芸奨励会専務理事などに就任（1940年10月まで）。	7月、博文館を退館。青蘭社出版部を創業し、絵雑誌『トモダチ』『幼女画報』を創刊。			
1929	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12												6月ごろ（推定）、青蘭社出版部を森永製菓との合資会社に改組。			
1930	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12												9月、雑誌『少年少女絵物語』を創刊。			
1931	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12															
1932	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12													7月、青蘭社出版部を廃業し、森永製菓の嘱託に（1937年まで）。		

森永製菓の児童文化関連事業



させていたことが経営報告書から判明している。流通の全体像はまだ不明であるが、例えば先の〈表1〉に挙げたミルクキャラメルやチョコレートに封入されたクーポンの賞品のなかに「月刊絵雑誌」が含まれていることから、賞品や景品として配布されたことは間違いない。

なお、このクーポンとの関連ははつきりしないものの、表紙に「賞森永製菓株式会社」のスタンプが押された『トモダチ』（第一五巻第一号、一九二九年一月発行）も確認できている。

出資の条件として森永の広告を掲載することや宣伝の便宜を図ることといった条件の提示はあったものの<sup>27)</sup>、実際の誌面を確かめると掲載記事・広告ともに改組前後で大きな変化はない。むしろ南部は合資会社化を自社への「応援」<sup>28)</sup>と受け止めていたようだ。両者の関係は順調に発展し、一九三〇（昭和5）年九月には読み物を中心とする年長者向の雑誌『少年少女絵物語』の創刊にこぎつける。しかし前年末から始まった世界恐慌の影響から逃れることはやはり困難であったのだろう。三二（同7）年八月の臨時株主総会で森永は資本金半額減資を決議する。社史所収の「業績一覧表」<sup>29)</sup>を見ると、三〇（同5）年まで四〇万円前後で推移していた益金が翌三二（同6）年になると上半期は一万九三二二円に、下半期になると六万一千三三三円にまで急落しており、前述の松崎半三郎の言葉を裏付けている。おそらくこ

うした厳しい経営状況が災いとなり、青蘭社への出資も見直しの対象となったのであろう。半額減資の株主総会が開かれる三二（同7）年夏に南部は青蘭社を廃業し、森永に嘱託として迎えられている（一九三七年まで）。

〈表2〉は、先の〈表1〉に挙げた印刷物に、同時期の池田文痴菴および南部新一の履歴と、青蘭社の雑誌発行時期の情報を追加したものである。南部の青蘭社廃業⇨嘱託就任の時期と、森永が自社から印刷物を出し始める時期がほぼ一致している様子を見ることができるとこの点に着眼すると、児童向けの刊行物は一九三二（昭和7）年ないしは三三（同8）年あたりまでを外注期、以後を（傍系会社を含む）自社刊行期と区分することが可能になると思われる。また青蘭社のみならず、外注期には同様の協力関係を結んだ出版社が複数あった可能性も残されている<sup>30)</sup>。

#### 四、執筆者のネットワーク

巖谷小波を師と仰ぎ、十数年のあいだ編輯記者として博文館に在籍した南部が、同館発行誌をはじめとする幼少年雑誌の執筆者たちとの間に広範なネットワークを築いていたことは間違いない。森永にとつて青蘭社への出資や嘱託契約は、南部が有していたこのネットワーク

を手に入れることをも意味した。編輯実務に長け、数多くの作家・画家と交流がある南部の力を借りることによって、単行本のみならず『オカシノクニ』や『漫画学校』のような逐次刊行物を自社で出すことが可能になったと思われる。

〔表3〕もまた調査途上の中間報告的なものではあるが、「絵本キャラクター」『オカシノクニ』『スエートランド』に作品（ノンフィクションや科学読物、挿絵を含む）を寄せた作家・画家をリストアップし、南部が博文館時代に初代編輯主任を務めた雑誌『少年少女譚海』（以下本稿では『譚海』と略す）<sup>31</sup> および青蘭社時代に創刊した『少年少女絵物語』<sup>32</sup> への寄稿状況と照らし合わせたものである。『譚海』は南部が長年夢みてきた雑誌であり、創刊に至るまでの苦労や実現した折の喜びを晩年までたびたび回想するような思い入れの深いものであった。

編輯主任は第一巻一号をもって小松原健に交代しているが、その後も博文館を去る直前の一九二八（昭和3）年一月号まで新井弘城名義で同誌に作品を寄せているほか、退館後も「南城一」の筆名で執筆している<sup>33</sup>。

〔表3〕を見ると、特に「絵本キャラクター」の執筆者のなかに、予め『譚海』への寄稿歴を持つ者が目立つ。鈴木御水、須藤重、玉井徳太郎、狭間祐行、嶺田弘らは南部が博文館を退館した後に『譚海』への

寄稿を開始しているため、必ずしも南部―『譚海』ルートと断定することはできないが、何より巖谷小波が筆をとっていることから博文館ネットワークが「絵本キャラクター」の実現に寄与したことは明白であろう。さらに青蘭社時代の仕事である『少年少女絵物語』への執筆状況にまで目配りすると、先の鈴木、須藤、玉井、狭間、嶺田はすべて同誌の寄稿者であり、南部と直接的なつながりを持つ人々であったことがわかる。このほかにも、安倍季雄は久留島武彦が一九一〇（明治43）年に組織した口演童話普及研究団体・回字会のメンバーで小波人脈に連なる人物の一人であるし、本田庄太郎は十代で『少年世界』の懸賞表紙図案に当選し、上京後は南部が編輯していた『幼年画報』『幼年世界』に寄稿していたことが判明している<sup>34</sup>。また高垣眸は大正末期から『譚海』をはじめ博文館の雑誌に少年少女ものを発表しており、南部が編輯主任を引き受けていた『少年世界』では「銀蛇の窟」<sup>35</sup> を、『少女世界』では「切支丹秘話 夜光珠綺譚」<sup>36</sup> をそれぞれ執筆するなどの交流があった。

なお、掲載作品に着目すると、高垣「長編怪奇物語 呪の星」のように、『少年少女絵物語』で連載された作品が『オカシノクニ』に転載されている例が見られるほか<sup>37</sup>、「長編絵物語 少年探偵」<sup>38</sup>をはじめ、「孝女巡礼おつる」「孝女白菊物語」<sup>39</sup> のように執筆者の名義はそれぞれ

〈表3〉各誌への寄稿状況

出版・発行年	1932	1933 -1935	1935 -1937	1920-1944	1930-1931	
作者・画家名	絵本 キャラメル	『オカシ ノクニ』	『スキート ランド』	執『少年 少女 譚海』 筆 期 間	執『少年 少女 絵物語』 筆 期 間	備 考
安倍季雄	○					久留島武彦主宰「回字会」メンバー
新井弘城 (南部新一)	○	○		1920年1月～1935年5月		「南城」名義の作品を含む
池田文痴菴 (池田信一)	○	○	○			森永社員
石井佛			○			「昆虫漫画」で解説を担当
巖谷小波	○			1920年1月～1927年12月		博文館で『少年世界』主筆などを歴任
宇山良夫			○			
大倉桃郎	○			1926年5月～1944年1月		
小田伸正郎		○	○			
川島秀雄		○				
岸渡福雄	○					キャラメル芸術審査員
草場卯一			○			
久野健		○				
健三郎		○	○			
芝久田まち子			○			
新川晴子		○				
鈴木御水	○			1930年6月～1940年1月	1930年9月～1931年4月	
須藤重	○			1929年8月～1940年8月	1930年10月～1931年2月	
高垣眸		○		1931年4月～1932年11月	1931年1月～4月	
田河水泡	○				1931年1月～4月	
武井武雄	○					森永の広告、ポスター等を担当
田代秀			○	1938年4月～1940年6月		
鋪正枝		○				
玉井徳太郎	○			1929年8月～1943年7月	1930年9月～1931年4月	
田町木ノ実		○				
田山大三郎			○			
中江正美	○					
長崎抜天	○					キャラメル芸術審査員
新関青花 (新関健之介)	○			1926年5月～1939年9月	1930年9月～1931年3月	
のぶかづ		○				
挟間祐行	○	○	○	1929年4月～1938年9月	1930年9月～1931年4月	
樋下田益三		○				
平野直		○			1930年9月～1931年4月	
深谷亮		○				
本田庄太郎	○			1920年1月～1930年12月		南部の博文館在館中から『幼年画報』『幼年世界』等に執筆
まさを生		○				
嶺田弘	○			1929年1月～1938年12月	1930年9月～1931年4月	
道永禎三	○					
モリクマタケシ		○		1940年2月(「森熊猛」表記)		
森山八郎			○			
矢島廣三			○	1939年10月～1940年3月 (※「矢島健三」名義なので別人か?)		
山口愛子			○			
山田義郎			○			
山邊美津枝			○			
横山彦芳		○		1939年1月～1940年3月	1930年10月～1931年4月	
吉村清		○				

れ別だが、同一または類似したタイトルを持つ作品が『譚海』や『少年少女絵物語』と『オカシノクニ』や『スキートランド』の双方に掲載されている例も散見される。今後、個々の書き手の経歴調査やテキストの照合を行い、転載の有無や転載の場合はその経緯などを調査していきたいと考えている。

## 五、おわりに

森永が児童文化事業を展開するにあたり、南部をはじめとする博文館ネットワークが関与した様子を確かめてきた。博文館と森永はいつ、どのような経緯でつながりを持つようになったのだろうか。まず広告の掲載にあたり森永と博文館の各誌編輯サイドの間に行き来があったことは間違いない。また同館が博文館印刷所に次いで興した多色印刷専門の精美堂（一九〇六年創業）が早くも大正初期に森永の包装紙類を受注していることや<sup>(40)</sup>、社内報『森永月報』が一九二四（大正13）年九月に自社印刷に移行する直前まで「博文館印刷所」に印刷を発注していたこと等、印刷面で双方がつながりを持っていたことも判明している。今回は子ども向けの刊行物のみを検討してきたが、池田文痴菴文庫には学校関係者向けの雑誌や前述の『森永月報』をはじめとする社内向け発行物、自社・他社を含む広告切り抜きなどのスクラップ

ブックも多数収められている。それらの分析を通して博文館はもちろんのこと、森永が他社あるいは他業種の人々とどのような接点を持ちながら児童文化事業を進めていったのか、引きつづき検証していきたい。

一方、森永の十返肇や今井武治、明治製菓の内田誠や戸板康二など、昭和初期の製菓会社広告部に多くの才能が集ったことについてはすでに多くの指摘がある。さらに社外に目を転じれば、森永の広告デザイナーに携わった多田北鳥や武井武雄らは児童文化の分野でも大きな仕事を遺した人々であった。このような個人のネットワークについても調査を続けるなかで、児童文化史のなかにおまけや景品を位置づけたと考えている。

### 〈注〉

- (1) 『創意工夫―江崎グリコ70年史―』（江崎グリコ株式会社、平成四年）三三九〜三四〇頁
- (2) 例えば第八巻第三号（一九三三年二月発行）には、童話「キヤラメル兄妹」（川端康成）、「狼とチョコレート」（小川未明）が掲載されている。
- (3) 『森永五十五年史』（森永製菓株式会社、昭和二十九年）二九二頁
- (4) 『森永キヤラメル芸術新聞』（一九三三年二月創刊）、池田文痴菴『キヤラメル芸術』（森永製菓株式会社学芸部、一九三二年）、山田義郎

- 『キヤラメル芸術子供テキスト』（オカシノクニ社、一九三四年）など。
- (5) 紅野謙介『書物の近代―メディアの文学史』（筑摩書房、一九九二年）一五八頁
- (6) 『森永製菓一〇〇年史―ははたくエンゼル、一世紀』（森永製菓株式会社、平成一二年）一〇四〜一〇五頁
- (7) 先行研究としては昭和初期の森永、江崎グリコ、わかもと等が販売促進のために作った絵本に言及した平岡弘子「企業と絵本」（鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ』ミネルヴァ書房、二〇〇二年）がある。また拙稿「南部新一と森永製菓―昭和初期における製菓会社の児童文化戦略をめぐって」（『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第二七号、二〇一四年三月）では、大阪府立中央図書館国際児童文学館の南部新一資料に収められた森永関係者の書簡を主な手がかりとして、南部と森永との関わりを検討した。
- (8) 本稿は埼玉県立浦和図書館「池田文痴菴文庫」の所蔵資料を中心に、大阪府立中央図書館国際児童文学館蔵書や、古書店での入手資料などをともに執筆した。なお、浦和図書館は二〇一四年度末の廃止が決定している。資料は今後、県立の他館に移動予定とのこと（浦和図書館の廃止について（2014-12-24）「埼玉県立図書館ホームページ」<https://www.lib.pref.saitama.jp/>二〇一五年一月三日閲覧）
- (9) 本稿では「飛行機セール」のように大人と子どもの双方を対象としたものも含めて「子ども対象の事業」ととらえ、検討対象とした。
- (10) おそらく年表に記載がある事業は主たるものに過ぎず、社史に記載
- されていない小規模のイベントが他に多数あったと推測される。また、本社が主催した事業のほか、各地の支社や系列店が実施した事業も多数あったことが「池田文痴菴文庫」の資料などから判明している。これらの状況を明らかにすることについては今後の課題としたい。
- (11) 『森永製菓一〇〇年史』（前掲書）九七頁
- (12) 『森永製菓一〇〇年史』（前掲書）九九頁
- (13) 『森永五十五年史』（前掲書）二九二頁および三三六頁
- (14) まれに八頁あるいは十頁の号もある。
- (15) 『オカシノクニ』『スキートランド』『漫画学校』は定価表示あり。創刊号の定価は『オカシノクニ』『スキートランド』がそれぞれ五錢（送料共）、『漫画学校』が三〇錢。発行所は三誌とも森永の傍系会社であった「オカシノクニ社」名義。
- (16) 『戦ふ少年』裏表紙に「森永ミゼット空箱ヲオ送りクダサイ 二〇枚デ立体紙芝居 一〇枚デパノラマ、四枚デド、ラマ、ヲサシアゲマス」との記載がある。
- (17) 『森永製菓一〇〇年史』（前掲書）一三八頁
- (18) 同時期に大阪朝日新聞や東京朝日新聞にも広告漫画の形で昆虫漫画が掲載されたとの情報がある。
- (19) 「昭和初期の森永ミルクキャラメルの昆虫漫画」とある文化人の世迷言」  
<http://bunkakonchexblog.jp/>23876061 二〇一四年二月三日閲覧。
- (19) 平岡弘子「企業と絵本」（前掲論文）によれば、「絵本キャラメル」は

次の一〇冊が発売された。このうち※印を付した三冊は現時点で現

物未確認であるが、〈表3〉には人名を反映させた。

- ① リンドバーグ大佐 (狭間祐行・作、嶺田弘・画) ※
- ② 星の御殿 (田川水泡・作画) ※
- ③ 最新航空機 (道永禎三・作、鈴木御水・画) ※
- ④ 三人の少女 (大倉桃郎・作、須藤重・画)
- ⑤ 東郷元帥 (池田文痴菴・作、玉井徳太郎・画)
- ⑥ サルノホームラン (巖谷小波・作、中江正美・画)
- ⑦ 鉄腕投手 (安倍季雄・作、新開青花・画)
- ⑧ イソツブ (新井弘城・文、本田庄太郎・画)
- ⑨ 桔梗と小川のメダカ (岸邊福雄・作、武井武雄・画)
- ⑩ 漫画神楽 (マンガ・カグラ) (長崎抜天・作画)
- (20) 『森永五十五年史』(前掲書) 一九九頁
- (21) 『森永製菓一〇〇年史』(前掲書) 九六頁
- (22) 南陀楼綾繁「池田文痴菴と森永製菓」『SUMUS』第九号(二〇〇二年五月)、第一〇号(二〇〇二年九月)、第一二号(二〇〇四年五月)
- (23) 南仏楼綾繁「池田文痴菴と森永製菓(中篇)」『SUMUS』第一〇号、五九頁
- (24) 自身の回想によれば、焼失した蒐集史料は図書だけで約五〇万冊あったという(南陀楼綾繁「池田文痴菴と森永製菓(後篇)」『SUMUS』第一二号、一〇一頁)
- (25) 寄贈の経緯については『朝日新聞(埼玉版)』(一九七二年一〇月二五日朝刊)に詳しい。
- (26) 拙稿「南部新一と森永製菓―昭和初期における製菓会社の児童文化戦略をめぐって―」(前掲論文) 一六〇―一九頁
- (27) 南部新一著作権管理団体の代表者・伊藤元雄氏の保存資料中に「青蘭社出版部八、トモダチ、幼女画報二、甲ノ広告を掲載シ、又八宣伝ノ便宜ヲ計リ、甲ハ広告料トシテ毎月三百円ヲ支払フコト」との条項を含む契約書案が見られる(「甲」は森永を指す)。
- (28) 「少年雑誌の『大工さん』 南部巨国」尾崎秀樹『夢をつむぐ』(光村図書、一九八六年) 四一頁
- (29) 『森永五十五年史』(前掲書) 四一八―四一九頁
- (30) 平岡も前掲書で指摘しているとおり、例えば児童教育社発行の絵雑誌『コドモキング』一九三三年三月号にはキャラクター芸術の特選作品がカラーで掲載されているほか、南部(新井弘城名義)や森永社員(三井由之助、山崎宗晴)らが寄稿している。他社の商品は取り上げていないことから、森永とのタイアップは明白である。
- (31) 一九二〇(大正9)年一月創刊。なお、〈表3〉の同誌執筆期間については『少年少女譚海』目次・解題・索引(解題・中川裕美、金沢文圃閣、二〇一〇年)に拠った。同書巻末の「収録誌発行年月一覧」を見ると部分的に未収録の号があるため、引きつづき調査の上、データを修正していききたい。
- (32) 一九三〇(昭和5)年九月創刊。現時点ではバックナンバーのうち、第一巻第三号(三〇年一月)〜第四号(同年二月)を未確認のため、『譚海』と同様、引きつづき調査しデータの正確を期したい。

- (33) 南部が「南城」の筆名を使用したことについては、土居安子「南部書簡から見た博文館―館員（元館員）からの書簡を中心に―」（『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第二七号、二〇一四年三月）、四八頁を参照。
- (34) 『本田庄太郎―友人・伊藤孝之氏の語る』上笙一郎『聞き書・日本児童出版美術史』（太平出版社、一九七四年）五七―五八頁
- (35) 一九二六（大正15）年一〇月から連載。
- (36) 一九二七（昭和2）年三月から連載。
- (37) 「長編怪奇物語 呪の星」『少年少女絵物語』一九三二年一―四月。『オカシノクニ』一九三三年一月―一九三四年一〇月。挿絵はともに横山彦芳が担当。
- (38) 新井弘光「長編絵物語 少年探偵」『少年少女絵物語』一九三一年一―四月まで連載確認。健三郎「冒険物語 少年探偵」『オカシノクニ』一九三三年一月―『スキートランド』一九三五年九月まで連載確認。例えば「孝女巡礼おつる」は『譚海』（額田六福名義）、『少年少女絵物語』（齋藤春満名義）、『オカシノクニ』（田町木ノ実名義）に掲載されている。
- (40) 『共同印刷百年史』（共同印刷株式会社、平成九年）には、大正五年当時の得意先の一つに「森永製菓」が挙げられている（五九頁）。

〈追記〉

- ・引用部の旧字体は新字体に適宜改めた。
- ・本研究は平成二六年度愛知淑徳大学研究助成（特定課題研究）の成果の一部である。
- ・「池田文痴菴文庫」の調査に際して、埼玉県立浦和図書館に大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。